

六日には最高の一万七千三百個できる。かくして九月二十日、年間ノルマの四百五十万個を突破して生産を終了した。日曜もなく全くの休みなしの四か月間だった。

## 生き抜いた

### シベリアの抑留苦勞の四年

高知県 那須 忠 男

独立混成第三百十旅団も、終戦とともに作業隊第十五大隊に編入、そして黒河經由、ソ連ブラゴエ地区に渡り、貨物列車でのシベリア抑留の旅となり、二日に一度の食糧の配分もまちまちで、貨車の中は暗く、昼か夜かもしれない旅が続いた。真夜中、ふと停車した小さな駅で、一人の死者を下ろした。そして列車はすぐ発車した。

十月二十六日早朝、列車は停車、全員下車の命令が出た。すでにその地は積雪、寒さは身にしみた。そして第三十九地区ジスガスカム収容所に入所した。収容所の給

与は、コーリヤンのスープと一日三百グラムの黒パンであった。十一月に入り、作業命令が出て、私は河川工事場の作業となり、川にたまった山から十字鍬で掘り出した石を背中にロープで負い、地面を這うようにして運ぶ毎日が続いた。

零下数十度という寒さ、川辺の風は特別に強く、空腹と労働とで栄養不良者が続発して、収容所の病院は満員で、続いて出る病人は入院することができなく作業に出るという状態で、何の手当てもなく作業から帰り死亡という、恐るべきシベリア抑留の第三十九地区収容所での残酷な労働のスタートだった。

二十年、二十一年の春にかけての死者は数百人出たと聞いた。人ごとと思えない、明日の生命に全然自信がなく、遂に私も作業場で三十九度余りの高熱が出るようになり、私は作業場がれんが工場に変わった。野外の作業を思ったとき、屋内の仕事で、私は生命に明かりが見えた思いで、二名の兵隊を受け、作業に着いたが、だれも三日と続かないという、両方の作業のノルマの板挟みで大変だった。

私は頑張った。また二人の者もよく協力してくれた。

私は切り抜けたので、作業隊長も驚いていた。両方の作業のノルマを達成できたが、本当によくぞできた、私も二人とともに語り合った。

そして三十九地区収容所でも生き抜き、二十一年十二月二十六日、第三十七地区バルハン収容所に入所した。

収容所の給与は最低だった。私の作業は建築工事場の水道工事の穴掘りであった。地面は凍り、十字鍬では掘ることができなく、鉄ノミとハンマでの作業であったが、悪条件の作業は、努力をしても能率は全然上がるわけがなく、パーセントはゼロ、現場昼食なしという三か月が続いた。

監督は、昼食がほしければノルマ達成せよと笑って見てゆく、バルハンの残酷なスタートとなった。昼休みに空腹の余り、草むらに出てくる十センチくらいのトカゲを全員で取り、皮をむき、日光で乾燥してそのまま食して作業をした。

そうした苦勞のバルハン収容所の思い出を残し、二十二年八月七日、ナホトカ第九地区収容所に入所した。収

容所の給与は依然として最低であったが、心の中では、日本帰国も目前かと希望は明るく、作業は海軍アパートの建設工事場の作業で、日本人の左官を必要としていて、徳島県の人で左官職、その手伝いとして十三人が希望で作業につき、私は助手としてこてを使ったが、全然経験のない私はよく注意され、努力していた。

ある日、ソ連軍の官舎増築の左官一人入用で、監督同行で作業場に来て、十三人の中で一番技術優秀者を一人抜き、連れていかれたので大変、左官の指導者を取られ、残った者はこてを使った経験者は一人もない。仕方なく土方に変更を監督に交渉したが、絶対駄目と受け入れてくれない。そこで私は左官技術を勉強するには絶好のチャンスと考え、みなも了解した。

私はこてを完全に使えるという勉強を懸命に努力して、技術面は自分の器用を生かし、作業面は監督の指示に従うという考えで、五カ月目のある日、私は左官にも大分馴れて、四階の外窓を左官していた。

ちょうどそのとき、モスコより海軍アパートの総監督が視察に見えて、作業ぶりをじっと見ていた。そして

現場監督に指示し、日本人の熱心な作業ぶりを高く評価する。そして技術もすばらしいと評価し、表彰せよと指示して帰ったと監督より伝えられ、パーセントは四七％で現場で初めての表彰グループとなり、監督の信用も厚く、私は左官の監督と認められ、素人左官の日本人として恥じることもなく、十三人は苦勞の甲斐があったと喜び合った。

そしてでき上がった四階建てのアパートには次々と入居人が増すという。ナホトカ収容所での苦勞と喜びを残して、二十三年五月元日、日本帰国の命令が出た。収容所全員でなく、私はナホトカ港に出て、迎えの永徳丸に乗船した。船内の皆様も歓迎してくれた。そして給与で白米のご飯のおにぎりが配分され、四年ぶりのお米の味は格別であった。

そして、東舞鶴港に上陸した。多くの出迎えを受け、収容所に入った。いろいろと検査を受け、五月九日、郷里帰宅となり、舞鶴駅に出た。駅には婦人部外多くの方の熱き歓迎を受け、列車に乗った。京都、大阪駅での歓迎ぶりは本当に感謝した。高知駅でも世話課の方、婦人

部の方の歓迎と、そのご厚情を思い出として帰宅という、よくぞ生き抜いたシベリア抑留、苦勞の四年の思い出を書き終わる。

## 生地獄シベリア抑留

和歌山県 南 口 佐 一

ソ連は自分の国の再建のためか、一九四五年から五年計画で、日本兵をシベリアに送り、ノルマ制で作業をさせて食事も事欠き、乏しくて丸一日何もないときも多々あった。この世の地獄を、真実ありのままにその実態を書いてみたいと思う。

当時、満州には兵員はいたが、武器弾薬はなく、若い現役兵は少なく、四十歳から五十歳くらいの老補充兵が多く、小銃も帯剣すらも支給されず、竹の水筒であった。私も八面通の飛行場の挺身隊員で訓練を受け、兵一人に戦車一台という体当たり戦法であった。すなわち爆薬を背に飛び込みする練習だ。